関　源太郎

『「経済社会」形成の経済思想』

——18世紀スコットランド「経済改良」思想の研究——

ミネルヴァ書房　1994.2　vi＋316ページ

わが国のアダム・スミス研究は，国際的に異例なほど盛んであるが，しかし，スミスが生まれたスコットランドの経済思想の研究となると，専門的関心をもって追求している研究者は，わが国にはごく少数しかいないし，英米にも少ないのが実情である．なるほど，スコットランド啓蒙の研究は近年はスミス研究以上に活発である．にもかかわらず，それとの関連で経済思想を改めて掘り起こすという研究も余り多くないのである．

本書は，そうした少数の試みに属す研究であって，スコットランドとイングランドの合邦(Union, 1707年)の時期から1730年代までの，スコットランドの経済改良を論じたパンフレッティアー6名(一人は匿名)の著作の内在的な解読によって「経済改良」思想の諸類型——合邦を利用する改良思想の類型と，それを拒否し，独自の経済社会を形成しようとする類型の二類型，また戦略的産業としてリネン製造業を選ぶか毛織物製造業を選ぶかの二類型に帰着する——をつかみだそうとしたオリジナルな研究である．

登場する人物6名のうち，第1，4章の主人公サー・ジョン・クラークには菊池紘一の，第3章のウィリアム・シートンには村松茂美の研究があるが，他の4名——第2章のデイヴィッド・ブラック，後編第5章の匿名者，第6章のパトリック・リンジィ，第7章トマス・メルヴィル——の研究は本書が本邦で嚆矢である．

この時期のスコットランドの経済パンフレットは膨大であるが，この6名を選び出した著者の基準は不明である——ブラックだけがナショナリスト＝合邦反対派で，残りの5名はユニオニスト＝合邦支持者となったことの説明もない——し，分析されたパンフレットが10点に満たないとしても，そのことは本書の最小の欠点でしかない．実際，300年近く昔のパンフレットを解読することは容易な業でないし，300年もの隔たりを埋めるために多くの作業が必要なことは，容易に理解できるであろう．アンド

ルー・フレッチャーが脇役でしか登場しないのは，例外的によく知られているからだろう．ケイムズやワイト，シンクレアやアンダースンが登場しないのは本書が1730年代を下限とするから当然である．

著者は，上述のような限定されたテクストを自分の目で丁寧に読み，コメンタールを加えていく．人跡未踏の地に分ける探検家は，既知の目印・情報を手がかりに，一歩一歩進むが，探検家のように慎重で堅実な著者の歩みは何を明らかにしたか．

(1)合邦は当時と以後のスコットランドの経済的，政治的運命を定めたが，合邦条約第15条に規定された国債支払いの等価として払われる代償金(Equivalent)約40万ポンドを，スコットランドの経済開発に利用するために設けられた組織である「スコットランド漁業・製造業振興委員会」(Board of Trustees for Fisheries and Manufactures in Scotland——著者は「管財人評議会」と訳しているが，管財人とは通常，破産者や債務者の財産の管理人を意味するから，適切さを欠く．以下評者は産業振興局と呼ぶ)の施策が重要であったし，当時の人々も期待を寄せたのであったが，その振興局の産業開発政策とその委員でもあったクラークについて，かれらが，漁業と，とりわけイングランドの産業と競合しないステイプルとしてリネン産業の振興に活路を見いだそうとしていた事情を明らかにした．この時期のスコットランドの経済問題に注目するとき，自立したブルジョアジーの存在が希薄なこの国では，地主紳士の役割とともに，財政手段をもつ振興局の活動が自ずからクローズ・アップされる．したがって，著者がこの団体の施策を詳細に——しかし未だ不明なことも多いが——紹介したことは有益である．さらに52年にはハイランド開発のために「接収所領管理局」が設けられ，産業資本形成のための「固有の重商主義政策」が一層推進されるのであるが，この時期の分析は菊池荘蔵と飯塚正朝に著者は譲っている．

(2)スコットランドに固有の重商主義を導入した合邦は，国民の多数の支持をえず，したがって，合邦支持者の経済開発のシナリオに対抗してイングランドから独立したスコットランドの独自の経済発展を展望する，合邦反対派の経済パンフレットも書かれた．その一例として著者が取り上げたのがデイヴィッド・ブラックという不詳の人物が著者とされてきたパンフレット(*Essay upon Industry and Trade*... 1706)である．ブラックは貨幣不足に象徴されるスコットランドの経済危機を克服するために，貿易を管理し，奢侈的生活を断ち切り，インダストリを鼓舞する政策を説く．ブラックは，イングランドはスコットランドに必要な物を供給しないから，必要な物を提供するフランスとの貿易を重視せよと言う．また原毛を輸出するのでなく，リネンよりも付加価値の大きい毛織物業を育成すべきだと言う．問題は職人の能力が低いことにあり，能力ある職工の育成策を都市当局に期待した．このパンフレットは1706年のものだから，産業振興局への論評も期待も当然にないのであるが，著者が紹介した，貧国の平和，安全，発展にとってインダストリがトレードの管理とともに重要であるという主張は，ある程度の説得力と普遍性をもつであろう．

(3)合邦論争で活躍し，合邦交渉委員としてクラークと協同した重要な人物がサー・ウィリアム・シートンである．シートンが合邦の2年前に発表した貿易に関するパンフレット(*Some Thoughts, on Ways and Means for making this Nation a Gainer in Foreign Commerce*... 1705)を分析した著者は，政策主体としての貿易裁定所の設立，伝統的な小規模漁法による漁業の奨励やリネンと毛織物の品質改善策，貨幣増加をはかる貨幣政策などの提案によって，イングランドと友好的な，輸出に先導された経済開発の展望を引き出す．シートンはこのように保護主義者であるが，従来の独占会社を容認するのではなく，小規模生産者が自由競争をすることによって国際競争力を獲得することを展望していたという点は注目に値する．基本的に合邦を前提にスコットランドの経済発展を構想したシートンはユニオニスト，クラークの路線を基本的に支持していることになるであろう．

(4)シートンの次に登場する匿名者(*Reasons for improving the fisheries and linnen manufacture of Scotland*... 1727)は制度的に合邦を支持し，また政策的にリネン製造業を重視する立場から，従来の政策を反省し，今や設置されようとしていた産業振興局の奨励すべき産業と政策を具体的に献策するとともに，高潔なジェントルマンの組織である振興局がインダストリと規則正しい生活習慣を国民に広める主体となることを期待したという．このインダストリは，*The Interest of Scotland*... 1733というパトリック・リンズィの重要な小著のキー・ワードとなり，労働主体の活動としてのインダストリの概念がリンズィによって彫琢された様相が，豊かに描きだ

されている．リンジィは合邦体制，産業振興局主導の経済開発論者であり，匿名者の献策を継承して，リネン産業をステイプル産業として育成し，海外市場を獲得して経済発展をめざすことにスコットランドの焦眉の課題を見た．このリンズィを批判して毛織物業の振興を主張し，具体的手立てを献策したのがメルヴィル(*The true Caledonian*...1734)であり，産業振興局を利己心の虜になっていると批判するメルヴィルは，原料から完成品まで国内生産し国内需要を満たす毛織物産業を確立することによって，国際関係に左右されない自立した産業構造を樹立すべきとした．

こうして著者の分析はスコットランドの改良思想の多様性を明らかにしている．6名の登場人物は，当局の保護と管理を前提しているという意味，漁業と農工業――産業資本――を育成しようとしているという意味で，固有の重商主義の論策の埒内にあるし，それがこの時期のスコットランドに必要だったという事実は否定しがたい．けれども，その内容は相当に多様であって，著者の二類型把握は基本的に妥当であるが，しかし著者が分析したサンプルの多様性はこの時期の経済論争の一層の多様性を予想させるに十分である．また，この時期から1760年ころまでリネン支持論が産業振興局の立場であり世論であったことも確かである．

著者の分析は緻密，説明は丁寧で時に冗長でさえある．それでも過剰解釈気味の文章や短絡的な箇所も，誤植とともに散見される．また第4章はテクストの年代からして後編に配置すべきであろうし，本書の副題は正確に「18世紀初頭……」とすべきだろうといった疑念もある．本書の全体を包括する時代とその枠組みを説明した序章は，この時期を展望するすぐれた叙述となっているが，2章以下の分析的議論はダイナミズムに欠け，単調さを克服できていない．それはテーマの限定された性質にもよるが，著者が外から持ち込んだ理論装置でテクストを裁断するという手法を採らないこととかかわる．著者は分析の鋭さを捨てて，客観的で正確な理解をめざし，テクストを原著者の意図と言説に即して再構成したのであって，学術論文として基本的に成功している．また著者は多くの知識を提供しており，本書は18世紀，遡って17世紀のスコットランド経済思想および経済史への入り口としても役立つであろう．

［田中秀夫］

[redacted]